

## YS-1

## 子どものセクシュアル・マイノリティについての基本的な考え方

佐々木 掌子

明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻

本セッションでは、子どものセクシュアル・マイノリティを考えるにあたり、性的指向(sexual orientation)、性役割(gender role)、性同一性(gender identity)を取り扱う。性的指向とは、恋愛や性愛における対象とする性別の指向性を指す。性役割とは、それぞれの性別ごとに社会的に付与された役割を指す。性同一性とは、性別の同一感やまとまり(アイデンティティ)を指す。心理学などでは、この3つが異なる概念として測定されてきた。これらを独立した別々の変数として捉えた上で、発達と個人差(ばらつき)について考え、ジェンダーやセクシュアリティに関する状態や表現が、いかに「ばらついているのか」を紹介したい。そのことで、「どこからをセクシュアル・マイノリティとみなすか」の線引きの難しさを示す。

性役割は、何を性役割とみなすのかに賛否あるものの、心理尺度で幼児期の性役割行動を測定した場合には男女差が大きい( $d=2.0$ )とされる。それでも、平均値周辺に男児女児の重複がみられ、男児も程度の問題で典型女児行動を取っており、女児も程度の問題で典型男児行動を取っており、分散がある。さらに就学前までは、性別ステレオタイプ知識に固執するものの、学童期に入り年齢が上がるにしたがって、柔軟性を獲得していくため、性役割行動における分布の重なりも大きくなる。

性的指向は、それをどう捉えるかによって幅があり、たとえばアイデンティティを尋ねるのか、魅力を感じる性別を尋ねるのか、触れたいと想像する性別を尋ねるのかによっても回答傾向が変化する。また、子どもの場合は親子間の回答に違いが出たり、年齢によっても性的指向のばらつき具合に差が生じる。

性同一性もまたさまざまな測定法があり、分散がみられる。「性自認は男」といったカテゴリー的理解ではなく、性同一性の濃淡に個人差があるという視点によって、多様性のイメージを持つことができるだろう。そして、性同一性がアイデンティティであることを踏まえると、アイデンティティとは、「私が私である」という本人の認識と「私は他者・社会によって承認されている」という認識の両方がそろって成立し、青年期以降の人生の中で何度も吟味され、再構築を繰り返すもの(伊藤, 2012)とされる。すなわち一人の人間の中でも、発達に伴って濃淡が見られることもまた、アイデンティティだからである。

ジェンダー・アイデンティティとは、アイデンティティの一つである。またセクシュアル・アイデンティティも、アイデンティティの一つである(しばしば英語圏ではsexual orientationのidentityをsexual identityと示す)。子どもたちの「今」のありようで決めつけず、子ども自身がモラトリアムを自由に自己探求できるよう、大人の適切な意識の持ち方や大人による環境整備が求められる。